加藤清正の実像

Kato Kiyomasa

徳川家康を総大将とする東軍の勝利に終わった慶長5年（1600）9月の関ヶ原の戦い。九州にあって東軍の勝利に大きく貢献した清正は、戦後家康より恩賞として領地を加増され、名実ともに大大名へと登り詰めます。

〈21〉肥後54万石の大名へ

慶長5年11月に薩摩の島津攻めが中止され、ここに九州での戦いは終結します。その後、清正は家康に年頭の祝儀と戦勝報告をおこなうため、12月に上方へと向かいます。年が改まって慶長6年正月、大坂城における年頭祝儀の席で家康による論功行賞が諸大名に正式に伝えられ、清正の領地加増も決定されました。関ヶ原の戦い直前に家康から「肥後と筑後を与える」との内約を得ていた清正でしたが、実際には相良氏に与えられた球磨郡を除く肥後一国だけが安堵されました。清正に与えられるはずだった筑後（現在の福岡県南部）は、関ヶ原の戦い後に行方を暗ませていた石田三成を捕縛する功績を挙げた田中吉政に与えられることになりました。清正は、当然肥後に加えて筑後も自分の領地になると思っていたようですが、後日隈本の重臣に宛てて出した書状の中で「筑後雖令相違候、不相替程ニ仕合共候間、可心安候」（筑後拝領の件は叶わなかったが、大したことはないので安心せよ）と述べていますので、こうなることはある程度覚悟していたのでしょう。しかしながら、戦いでの働きに対して領地が大幅に増えたことは事実で、清正が言うように当初の予定とは事情が変わってしまいましたが、少なからず領地拡大の目的は達成されたことで不満な様子はあまり見せていません。

さて、ここで清正が実際に与えられた地域を確認しましょう。清正が家康より安堵された地域は、もともと自身が領有していた飽田郡、託麻郡、山本郡、合志郡、玉名郡、山鹿郡、菊池郡、阿蘇郡と西軍に属した小西行長の旧領である益城郡、宇土郡、八代郡、芦北郡です。球磨郡を除いた現在の熊本県全域にあたります。ここで問題となるのが天草郡です。通説では、天草郡も一旦は清正に与えられ、キリシタンが多いとされる天草は統治が難しいため、豊後国（現在の大分県）のうち海部郡、大分郡、直入郡との交換を願い出て、天草郡に替わってこの豊後三郡を新たに領有することになったと言われています。清正が天草郡ではなく、豊後三郡を新たな領地として与えられたことは事実ですが、領地交換の理由をキリシタンの多さに求めることには疑問が残ります。キリシタンが多い地域は天草に限ったことではなく、小西行長の旧領には当時かなりのキリシタンがいたようです。イエズス会の宣教師ヴァリニャーノは、関ヶ原の戦い前年にローマへ送った報告書の中で「八代では2万5,000人が洗礼を受けた」と伝えています。人数の誇張を差し引いても、天草以外にも旧小西領には多くのキリシタンがいたことは間違いなく、そのような当時の状況下にあってキリシタンが多いという理由だけで天草が除外されたとは考えにくいです。問題の天草郡は、唐津藩主・寺沢広高の飛地として与えられています。このあたりの天草領有の経緯を示す史料が残されていないため、不明な点が多いですが、清正が天草郡を放棄したと言うよりも、おそらく天草郡は当時長崎奉行を兼任していた寺沢に与えられることが先決したため、押し出される形で清正に豊後三郡が宛がわれたと考えたほうが良さそうです。

慶長8年2月に家康が征夷大将軍に任官して江戸幕府を開くと、翌月には清正がこれまでの「主計頭」から「肥後守」へと任じられ、肥後一国を領する大名の格と地位に相応しい官名を名乗り始めます。また、清正は領地が確定した後、領国経営の基盤となる検地に取り掛かり、着実に領内検地を進めていきます。そうして慶長9年9月に幕府に正式な検地帳を提出して、ここに肥後藩の石高がようやく確定します。検地帳には、肥後国内の石高約52万石と豊後三郡の石高約2万石、合わせて54万石が書き上げられ、これにより「肥後54万石」の礎が築かれます。次の大名家・細川氏にもこの数字は継承されることとなり、以後幕末まで肥後藩の公式な石高（表高）として通用します。

秀吉の家臣となり、わずか知行高120石からスタートした清正の武将人生。それから24年後、徳川家の治世下で名実ともに大大名にまで登り詰めた清正。次号では、清正の出世を象徴する熊本城築城の真相に迫ってみたいと思います。



このコーナーは、大浪 和弥さん（元熊本博物館学芸員）が執筆しています。